

スタジオ夜話

第83話 スタジオ夜話

「音の良し悪し」音質への取り組み。 何が良い音、良い録音？

☆ はじめに

世の中暖冬の影響でスキー場など雪不足です。先日の「雪まつり」では雪を山から集める作業がたいへんだったとニュースで報じられていました。また変なウイルスが蔓延して世界中大変なことになっています。読者皆様はお元気に過ごしていることと勝手に思っています（願いです。）暖冬なので桜の開花も早くお花見も早めに実現できそう楽しみです。

さて今回のスタジオ夜話、予告のとおり音の良し悪しについてお話したいと思えます。前回まで「いまさらですがレコードを楽しむ」というお話をしてきましたお話の中では何が「良い音」「好い音」といったことも説明してきました。読者皆様は音の専門家です。どんな環境でも最善の仕事をなさっていることと存じていますが、ここで筆者と一度再確認してもと思いスタジオ夜話的に検証してみることにしました。あまりにもシンプルなテーマで今更と思う方々も多くいると理解はしていますが、「良い音・好い音」と一緒に考えてみましょう。お付き合いよろしくお願いたします

☆「音の聴かれ方」Ⅰ

聞かれかたではありません。

「聞かれる」と「聴かれる」には大きな違いがあります。英語的には前者を「Hearing」後者を「Listening」と表現するのが解りやすいと思います。

「聞く」は音を物理的に聞くであり、「聴く」は身を入れてという条件があります。かつてのマニアがレコードを聴く特別の部屋をリスニングルームと言っていたのが理解できます。

一方スタジオの調整室はリスニングルー

ムとはいいません。ヒアリングルームともいいません。コントロールルーム調整室なのです。あくまでも音を様々に扱う部屋なのです。もちろんそこで扱う音を「身を入れて聴く」のでから、それ相応の音で再生できる装置でなくてはなりません。

そうした作業用途の装置をモニター機器と呼んでいます。モニター「Monitor」とは監視、観測、と言った意味があります。総合的にまとめてみると調整室コントロールルームでは扱う音を身を入れて聴き、監視観測しながら調整することを目的とした音を求めていくことが重要と考えられます。そうした作業用に適した装置が再生する音がモニター用の「良い音」であると考えられます。

筆者宅のぬるいAMP(?)とSPではモニター目的を果たせないということになり個人のリスニングにとっては「好い音」ではあるがモニターという目的には不向きな装置ということになります。

☆「音の聴かれ方」Ⅱ

「好い音」「良い音」その違い

既に読者皆様はお気づきのこととは思いますが「良い音」＝「好い音」ではないということです。スタジオ夜話的にはスタジオモニター装置が必ずしもリスニング目的で「好い音」を再生する可能性は少ないことを申し上げたい。個人の音楽に対する趣味嗜好は様々であり、リスニング装置の選択肢もまた多種多様です。ただし一つだけハッキリとわかっている事実があります。

音楽を楽しむための再生装置か(?)音楽を商品に創り上げるための装置か(?)という目的の違いです。

音楽を楽しむ、キッチンで料理を作る時に楽しむ、マニアとは言わないまでもそれ

の時間をつくり、再生装置の前でお気に入りの音楽を楽しむことと、音のプロが音楽を創るときとは、全く音に対する姿勢が違います。(気の持ち方をお話しているではありません。)[好い音][良い音]を出す装置の話です。

多くのオーディオ評論家がマニア相手に様々なコメントを出しています。雑誌もそれなりに売れています。多くはキッチンのながら聴き用のベストチョイスについてはコメントしません。

世のオーディオ評論家はキッチンで音楽を楽しめないのでしょうか(?)キッチンでは「好い音」は聞くことができないのでしょうか(?)。

そこにプロのエンジニアを含め「好い音」と「良い音」の誤解が生まれていることに、気が付かなくてはなりません。

仮にモニター装置が「良い音」を再生すると仮定して、キッチンで音楽を楽しむためには小型のモニター装置を用意しないと・・・また筆者はリスニング用にはぬるい(?)装置を使用して大好きなJAZZを楽しんでいますが、それは「良い音」ではないのですか。読者皆様はよく理解していると存じています。こうした問題は毛嫌いされることも多いのですが、後進達には時々お話ください。お願いたします。

☆「音の聴かれ方」Ⅲ

「良い音」をモニターするために

「音の聴かれ方」についてⅠ、Ⅱとお話してきました。

ここではスタジオ作業上のモニタリング作業についてお話をします。

モニタリング作業と装置の関係は一般的にはコンソールアウト以降をモニター装置と理解しています。実はアナログからデ



映画に命を吹き込む音楽。有名な JAZZ マンは、
試写を見ながら、即興で音を入れたそうです。(mo)

デジタルに移行した時代から今日までもこの領域はアナログ装置の世界なのです。調整卓コンソールや周辺機器は現在概ねデジタルになりましたが大きく音質を左右する要素はマイクロフォンとこのモニター系統の装置、アナログの世界なのです。

いずれ別の機会にマイクロフォンのお話はしますが今回はモニタリングを中心にお話します。

このセクションはコンソールから出力された信号をパワーアンプで増幅して SP を駆動するセクションです。

近年 SP メーカーでは設計した製品の特徴を最大限に活かすため AMP 内蔵型のパワードタイプと呼ばれるもの、また場合に

よっては推奨 AMP を指定するものもあります。

またスタジオのコンセプトによっては多くのオリジナルの選択をしているスタジオもあります。

この3つの選択にはそれなりの意義があります。スタジオ夜話的にはそれ以外作業目的（モニタリングは目的が大切）によってこのモニタリングシステムを考えてみる必要があると考えます。目的別スタジオの仕様、作業コンソールの使い方によるモニタリング方法の工夫など様々です。一度整理してみましょう。

☆次回は

今回の続きです。「良い音」を求めてスタジオではどんなモニタリングが重要か、そこで創られた音楽は「好い音」を提供できるのか(?)

モニタリングシステムを検証することで解決して行きます。

花見を楽しみにして、変なウィルスに負けないよう健康に気を付けてお過ごしください。次回もよろしくお願いたします。

— 森田 雅行 —